

「古の遺愛」小考

—名越時敏（左源太）著「常不止集」をめぐって—

附 「旧典類聚」の諸本等について

内 倉 昭 文

はじめに

黎明館（調査史料室）では、原則として毎年二冊『鹿児島県史料』を刊行している。平成二十四年度は、「旧記雑録分野」が「旧記雑録拾遺記録所史料一」を、幕末維新分野が「名越時敏史料三」を刊行した¹。

名越時敏（左源太）については、一般に幕末期に奄美の豊かな自然や風俗等を描いた「南島雑話」の作者（の一人）として知られているが、本稿では時敏自身についての詳細な記述は省略する。また、「名越時敏史料三」におさめられた史料は時敏の手になる「常不止集²」のほぼ前半部分であるが、「常不止集」自体についての詳述も省略する。詳しくは安藤保氏（鹿児島県史料編さん顧問）による同書「解題」及び拙稿「『鹿児島県史料 名越時敏史料』について —収録（予定）史料に関する書誌的な研究等を中心に—」（『黎明館調査研究報告』第二四集）等を参照されたい。

本稿では、「鹿児島県史料 名越時敏史料三」中に収められた「常不止集」のうち、第十二巻に収録されている史料「古の遺愛」について、書誌的な側面を中心に論を進めたい。従って、そこに記述された内容については、あくまでも必要な場合のみに限って触れるに留めたい。

— 「古の遺愛」について

「古の遺愛」及び島津宗信については、前掲「名越時敏史料三」の「解題」に非常によくまとめられているので、少々長くなるがその一節を紹介する。

「（前略）「古の遺愛」は、薩摩藩六代藩主宗信の慈愛の事績を讃えるために、その言行を肥後半蔵が記したものである。（中略）宗信は五代藩主継豊の長庶子として生まれた。宗信誕生後に將軍綱吉・吉宗の養女となった竹姫が継豊の正室となるが、その結婚の条件として、もし竹姫との間に男子が誕生しても世嗣にはしないと条件付きの結婚であったことはよく知られている。また、宗信も尾張徳川家との婚姻も実現せず、治世期間四年の短さに加え、享年二十二歳という若年で死去したため悲劇の藩主として見られていたことと共に、「古の遺愛」によりその慈徳は江戸時代から喧伝され慕われていた。そのため写本も多く作られている。（後略）²」

名越時敏はいわゆる「筆まめ」でその著作の多さで知られている。「常不止集」に限らず、「名越時敏日史」などにおいても、見聞した多数の法令・文献等を採録しており、その一連の流れとして「常不止集」に「古の遺愛」を書写していたとしても何ら不思議はない。加えて、慈愛

溢れる名君と伝わる宗信の事績についての書物は、時敏自身においてもある種の感慨を少なからず抱かせ、ぜひその記録を手許に置き留めたいとの想いを湧き起こしたのかも知れない。

しかしながらそれ以外の一つの可能性として、宗信の父継豊の母が、名越右膳恒渡の妹（お須磨・月桂院）であること、すなわち宗信が名越家の血を引いている（名越家一族の孫である）という（鳥津氏正統系図・「薩陽武鑑」・「名越家系図」（内村八紘）「名越左源太と長男・時成（変名・三笠政之介）等」）ことが、その採録の判断に何らかの影響を与えたかも知れないということは、言い過ぎであろうか。そうでなくとも、その書写に際して時敏自身が、何らかの特別な気持ちを少なからず抱いたのであることは想像に難くない。ちなみに、「名越時敏日史」や「常不止集」には、浄光明寺の浄国院（鳥津吉貴）・月桂院（お須磨）の墓所へ参詣した記事も散見される。

なお、「（前略）「古の遺愛」と対の形で書写されることの多い宗信の傳育役伊集院俊矩の事績を収録した「伊集院俊矩言行録」も篤烈は書写しているが、本文は「常不止集」には載せず、ただ書写したことのみを記している」（前掲「解題」）が、その理由については不明である。

二 「古の遺愛」の「刊本」及び「写本」等について

（一）「国書総目録」の記載について

『補訂版 国書総目録 第一巻』（岩波書店、一九八九年）の「古の遺愛」のところには、「一冊 ⑧伝記 ⑨肥後尚志郎編 ⑩享保末年？

⑪国会・東大史料」とある。これに加えて、『補訂版 国書総目録 第八巻』（岩波書店、一九九四年）の「補遺」に掲載された「古の遺愛」のところには、「⑫鹿兒島大玉里（天保一二鳥津久光写）（一冊）・鹿兒島 削除 ⑬東大史料」とある。後者において東大史料編纂所蔵分がなぜ「削除」されたのかわからないが、ひよっとするとそれが「旧典類聚」の項の方に「集約」されたからであろうか（二の（三）の【A】参照）。

また、同じく「補訂版 国書総目録 第七巻」（岩波書店、一九九四年）の「名君行録」のところには、「一冊 ⑭伝記 ⑮鹿兒島鳥津家」とある。この「名君行録」は、「古の遺愛」の異本を指しているのではないかと思われる（二の（三）の【B】①イ及び二の（三）の【B】②参照）が、詳細不明である。

以上が「国書総目録」に記載されたものであるが、しかしながら実際にはこれ以外に多数の写本等が存在している。平成二十五年十二月現在、「古の遺愛」の「原本」と思われるものの所在は確認されていないが、現時点で筆者が確認している「刊本」及び「写本」は以下のとおりである。³ただし、県内外の「薩藩」旧伝集」の写本中のものについては、一部を除いてその所在も含めて実質的な調査は行っていないので、その点御了承いただきたい。

（二）「刊本」について

ごくごく一部分を紹介・引用したものを除いては、筆者が現時点で把握しているものは、次の二点である（『鹿兒島県史料 名越時敏史料 三』を除く）。

①『薩藩叢書』及び『新薩藩叢書』

全体を省略せずに翻刻して出版されたものとしては、よく知られているとおり基本的に『薩藩叢書』及びその復刻版である『新薩藩叢書』のみである。『新薩藩叢書』の「刊行の辞」によると、『薩藩叢書』は伊地知茂七を代表とする薩藩叢書刊行会によって「明治四十一年から同四十三年までに全五巻・別集一巻として刊行された」ものである。これに対し「新薩藩叢書」は「薩藩叢書」に「薩隅日地理纂考」（明治三十一年刊行、鹿児島県私立教育会）を入れて全六巻として、昭和四十六（一九七二）年に歴史図書社から復刻出版されたものである（前掲「刊行の辞」）。

「古の遺愛」は両書の第一巻に収載された「薩藩旧伝集」（巻四）の一部として（⁴）ほば全文翻刻・紹介されている。

②「古の遺愛（抄）」（『東洋思想研究 第62号』金鶏学院東洋思想研究所、昭和十九年）・・・ただしこれは「抄本」である。

(三)「写本」について

以下、大きく【A】「旧典類聚」所収のもの、【B】その他のもの、の二つに分けて述べる。

【A】「旧典類聚」所収の「古の遺愛」について⁵

【補訂版 国書総目録 第二巻】（岩波書店、一九九三年）の「旧典類聚」のところには、「二一巻三三冊 ⑧記録 ⑨東大史料（町田久成本）・都史料（雑纂一四）」とある。

しかしながら、実際には「旧典類聚」はそれ以外にも多数存在してい

る。以下、現時点で筆者が把握しているものを、その所蔵先等ごとく並べてみたい。⁶

①「東京大学史料編纂所」所蔵本

A. 「旧典類聚十八」に所収されている。同所のホームページのデータベース上の記載によると、この「旧典類聚」（全巻）は「江戸末期／本所謄写本（2040. 1〜27）（註 次の「イ」に相当）ノ元本？」である。その画像で見た限りではあるが、同所に存在する他の「旧典類聚」の原本の可能性が比較的強く考えられるものである。さらには玉里島津家で書写されて、現在黎明館に寄託されている「旧典類聚」についても、その原本である可能性も十分考えられる。なお、その画像は比較的容易にダウンロードできるようになっている。

イ. 「旧典類聚十八下」に所収されている。同じくデータベース上の記載によれば、「原藏者 島津忠義・町田久成／謄写本／撮影・複本作成 1885・1886／32冊」とある。前掲『国書総目録』に記載されたものはこれではないか。

②「鹿児島県立図書館」所蔵本

鹿児島県立図書館に、「旧典類聚」の一〜二十一巻が収蔵されている。ただし（データベース上では）九巻の巻数が記載されたものはないが、巻数無記載のものが二冊ある。そのうちの二冊の内容は「島津勲功記」（1〜3）となっており、これが事実上の九巻にあたるものである（無記載のもう一巻は同じくデータベース上で見あたらない「十巻の上」か「十一巻の下」か）。

同じくそのデータベース上では、「注記 鹿兒島県維新史料編さん所蔵」とあるので、現調査史料室にその画像（マイクロフィルム及び紙焼き製本されたもの）が架蔵されているうちの、おそらく東京大学史料編纂所所蔵のもの写しではないかと思われる。

③ 「玉里島津家史料」本

「旧典類聚十八下」に所収されている。現在黎明館に他の多数の史料と共に寄託されている。玉里島津家の編輯所で書写されたものと考えられる。

以下については「国書総目録」あるいはインターネット上のデータのみによるものであるが、参考のために取り上げる。

④ 「東京都公文書館」所蔵本

前述したとおり、『補訂版 国書総目録 第二巻』（岩波書店、一九八九年）の「旧典類聚」のところには「都史料（雑纂一四）」とあるが、この「都史料」とは旧「東京都政史料館」のことで、（そのインターネット上のホームページによれば）現在の「東京都公文書館」のことであろう。「古の遺愛」には、大火など江戸時代の江戸城下における事績も記載されており、それがために都機関に収集されたものであるうか、その詳細（経緯・内容等）は現時点で把握していない。

⑤ 「宮崎県立図書館」所蔵本

インターネット上の検索の結果によると、全二十一巻が揃っている。

その「著者」には「鹿兒島藩」／編、「注記」には「墨書 自館複製資料、原書は宮崎県総合博物館」、「出版年月日等」には「1977」とある。なお、「十七下」のみ「原書は宮崎県総合博物館」との記載がないが、これは単なる記入漏れか、何か別の理由（宮崎県総合博物館にはこの本のみ収蔵されていないなど）があるのかわからない。

⑥ 「宮崎県総合博物館」所蔵本

前記⑤を参照のこと。作成（書写）年代等詳細は不明である。なお、⑤・⑥ともに、そこに「旧典類聚」が収集されたことについて、特に江戸以前における南九州地域の歴史的状况等を勘案した場合に、その理由は容易に推察できよう。

以上、現時点で筆者がその所在を把握している「旧典類聚」を列挙したが、「名越時敏史料三」所収の「古の遺愛」の校訂作業においては、④以下においてはその内容に全く目を通していない。もっとはっきり言えば、時間的な制約などにより、全てを代表させて「旧典類聚」の「原本」ではないかと思われる「①のア」を重点的に参照・利用させていただいたことをお断りしておきたい。

【B】その他の「古の遺愛」

残念ながら、現時点で「古の遺愛」の原本は確認されていない。そのかわり、写本の方は多数存在している。以下、現時点で筆者が把握しているものを取り上げる。

①「東京大学史料編纂所」所蔵本

ア. 同所のデータベース上の記載によれば、書名が「古遺愛」とあり、さらに「原蔵者：浅草文庫（東京府）／修史館第二局乙科令写／1878/66丁」とある。その画像で見ると内表紙（内題）に「慈徳公島津忠顕ノ事蹟也」とある。

イ. 「常不止集 十二之巻」（に採録されているもの）大正十四（一九二五）年末「島津家臨時編輯所」で書写された写本で、現在東京大学史料編纂所所蔵のいわゆる「島津家本」である。その始めには「異本ニ明君行録とあり」、奥付には「西村幸子氏所蔵原本一冊」とある。

②「西村天因旧蔵（西村貞則氏所蔵）本」（黎明館寄託本）

「常不止集 十二之巻」（に採録されているもの）名越時敏の自筆と思われるもので、①のイの原本にあたる。なお、その始めには①と同様に「異本ニ明君行録とあり」とある。これは西村天因の旧蔵品で、大正十三（一九二四）年天因が亡くなった後に夫人の手を経て現在の（種子島の）御子孫の許に伝来した。現在黎明館に寄託されている。なお、これを含む多数の時敏の著作物（「常不止集」「続常不止集」「嘉多美農水」「岩瀬之玉」等）が天因の許に集まった理由については詳らかではないが、一つの可能性として、時敏の息子轟の夫人と天因の最初の夫人が、同じ三原一族（姉妹と思われる）であり、時敏の娘（轟の姉）も含めて実際にお互いの交流があったということが考えられる（天因の二度目の夫人も同じ三原一族から来ている）。

今回の『鹿児島県史料 名越時敏史料三』（「常不止集」のほぼ前半部分）においては、これを事実上の底本の一つとして取り扱っている。

③「鹿児島県立図書館」所蔵本

「鹿児島縣廳蔵」の用紙に写してある。二の（二）の①の「例言」では、「縣廳本に據る」とあるので、これがその底本もしくはそれに準じるものではないだろうか。なお、その内表紙に「明治十七年二月謄写」とある。また、別途その複製（コピー）本もあり、他の多くの史料同様そちらが同館2階の「郷土資料コーナー」にあり、一般の閲覧・複写用に供されている。

④「国立国会図書館」所蔵本

そのホームページのデータベース上の記載では、「写本／和装／一冊」とあり、その内表紙（？）に「島津宥邦公事績（宗信）」とある。なお、巻末には「益之助様初而御登城之覚」も収載されている。校訂本としての検討を行う段階では、筆者が上京の際直接閲覧等を行ったが、現在同館が順次進めている「デジタル化」（カラー画面）が既に済んでおり、インターネットでも簡単に閲覧、画像印刷が可能となっている。

一見したところ、次に取り上げる「国立公文書館」所蔵本とほぼ同じ系統のもの（おそらくその写しか）と思われる。ちなみに、後述する（記載がかなり限定された）「福山平太夫」の頭註の部分が、「国立公文書館」所蔵本では朱書となっているが、これは墨書となっている。

⑤「国立公文書館」所蔵本

ホームページのデータベース上では「写本／和書／一冊／旧蔵者 町田久成」とある。「国立国会図書館」所蔵本及び「常不止集」収載のものとの原本あるいは書写した共通の原本をもつ可能性も考えられるもので、

筆者が現在把握している全ての写本の中では一番の善本ではないかと思われるが、これについては後述する。

なお、「古の遺愛」の最後の一部分（編纂の経緯等を手短かに述べた部分）については写本・原本共に「常不止集」からは欠落しており、何らかの理由で名越時敏が書写しなかった箇所ではあるが、後述するように「〔名越時敏史料三〕」収載のそれを「古の遺愛」の決定版とすること
を意図（前掲「解題」）したため、敢えてその部分をこの「国立公文書館」所蔵本から補わさせていただいた。

⑥ 「鹿児島大学附属図書館」所蔵本

ア. 「古之遺愛（完）」（玉里文庫地の部3番2020）

『玉里文庫目録』（鹿児島大学附属図書館、昭和四十一年）には「天保12年島津久光写、大本」とある。これは二の（一）のところで既に述べた「国書総目録」に記載されたものであろう。ちなみに「国立公文書館」所蔵本と共に、善本であると判断される。なお、これに対し名越時敏のそれ（二の（三）の【B】②）は天保十三年（正月）の書写である。

その両者の書写の経緯など詳細についてはわからない。

イ. 「古之遺愛（全）」（玉里文庫天の部5番智165）

前掲『玉里文庫目録』には「十文字表紙大本」とある。アの久光が写した本の写本の可能性もある。

なお、鹿児島大学附属図書館のホームページのデータベース等によると、この本の複製本が別途作成されており、そちらの方が一般の利用に供されている。

⑦ 「玉里島津家史料」本（薩藩旧伝集）

「薩藩旧伝集四」に所収されている。玉里島津家に伝来したもので、現在黎明館に他の多数の史資料と共に寄託されている。なお、その奥書に「原書以縣廳本写之 明治二十一年二月七日 筆者 野崎七郎 同 三月廿五日 糾合 児玉五兵衛 同 五代徳夫」とある。

（四）「古の遺愛」（写本）の（仮の）系統分けについて

以下、その内容の複数の箇所の差異等から、筆者が考えている「古の遺愛」のグループ分けを示す。ただし、実際にその内容について未見のものは除く。さらに、筆者が必要に迫られて取り敢えず行ったものであり、あくまでも現時点での「仮」のものであるとお断りしておく。また、グループ名も便宜上付した「仮称」である。いわゆる「中間報告」的なものである点少々申し訳ないが、今後完全なものの作成をめざされる方の「踏み台」程度にはなるものと自負している。

① 名越時敏本グループ 【※「名越時敏史料三」底本】

ア. 「常不止集 十二」（大正末期 写本／東京大学史料編纂所所蔵）

イ. 「常不止集 十二」（名越時敏（自筆）原本、西村家所蔵）

② 鹿児島県立図書館本（県図本）グループ

ア. 『（新）薩藩叢書（一）』 【※刊本】

イ. 「鹿児島県立図書館」所蔵本

複製（コピー）本も含む。

ウ. 「玉里島津家史料」本「薩藩旧伝集」・・・薩藩旧伝集四（黎明館保

管)

エ. 「古の遺愛(抄)」(『東洋思想研究 第62号』金鶏学院東洋思想研究所、昭和十九年)

【※刊本】

③ 東京大学史料編纂所蔵本グループ

※「ア」がこのグループでの) 原本で、「イ」・「ウ」はその写本か。

ア. 「東京大学史料編纂所」蔵本・・・旧典類聚十八(江戸末期／「カ」ノ元本?↑所蔵者註記)

イ. 「東京大学史料編纂所」蔵本・・・旧典類聚十八下(原藏者 島津忠義・町田久成／謄写本／撮影・複本作成 1885・1886／32冊)(のうち1冊)

ウ. 「玉里島津家史料」本「旧典類聚」・・・旧典類聚十八下(黎明館保管)

④ 内閣文庫本グループ

※「イ」は「ア」の写本と思われる。また、⑤も「ア」の写本の可能性もあり(または遡ると共通の原本が存在か)。さらに、「常不止集十二」の原本は「ア」の可能性もあり(または遡ると共通の原本が存在する可能性も考えられる)。

ア. 「国立公文書館」蔵本・・・写本／和書／一冊／蔵者・・・町田久成／内題に「島津宥邦公事績(宗信)」とあり。

イ. 「国立国会図書館」蔵本・・・写本／和装／一冊／内題に「島津宥邦公事績(宗信)」とあり。

ウ. 「東京大学史料編纂所」蔵本・・・(原蔵者・・・浅草文庫(東京府)

／修史館第二局乙科令写／1878／66丁)

⑤ 鹿兒島大学付属図書館蔵本グループ

ア. 「古の遺愛(完)」(玉里文庫地の部3番2020)

『玉里文庫目録』(鹿兒島大学付属図書館、昭和四十一年)の「天保12年島津久光写、大本」とある。

イ. 「古の遺愛(全)」(玉里文庫天の部5番智165)(複製本も含む)

これらの中で、一番の善本は④の「ア」であり、また名越時敏の「常不止集」に収録したものと最も近いと思われるが、これに関連してはまた後述したい。なお参考までに、それに次ぐ(それ程差のない)善本は、⑤のア(島津久光写本)ではないかという感想を持っている。

(五) 「名越時敏史料三」に「古の遺愛」を収録した理由について

「古の遺愛」の刊本が既に存在するのになぜそのまま「名越時敏史料三」に収録したのか。

先に触れたとおり、全体を省略せずに翻刻して出版されたものとしては、よく知られているとおり基本的に『薩藩叢書』及びその復刻版である『新薩藩叢書』のみである(二の(二)の①参照)。

「古の遺愛」は前述したとおり、両書の第一巻に収録された「薩藩旧伝集」(巻四)の一部として(ほぼ)全文翻刻・紹介されている。その上で敢えてそのまま「名越時敏史料三」に収録した理由は、主に「(前略)既刊行本とは異なる部分も多々あり、より善本として刊行すること

に意味を見だし、本巻に含めることにした」(前掲「解題」)からであり、数多ある写本の中で、時敏が書写したものの原本に近いと思われるもの及びより善本であると判断されたいいくつかの写本を中心の校訂本としてピックアップし、「(前略)これらの写本などとの突き合わせにより、「古の遺愛」の決定版とすることを意図」(前掲「解題」)したからである。

参考までに、「鹿児島県史料 名越時敏史料三」(「常不止集」)に所収した「古の遺愛」では、例えば『薩藩叢書』及び『新薩藩叢書』では欠落(?)した「福山平太夫」の註(説明)も採録してあるが、これは数多ある写本の中で、「常不止集」以外には前節の「国立公文書館」所蔵本及びその写しと思われる「国立国会図書館」所蔵本及び「東京大学史料編纂所」所蔵本・(原蔵者・浅草文庫(東京府) / 修史館第二局乙科令写 / 1878 / 66丁)、「鹿児島大学附属図書館所蔵本」(天保12年島津久光写、大本)などごく限られたものにはしか見られない。

ただし、その中で「鹿児島大学附属図書館所蔵本」(天保12年島津久光写、大本)の方は、「福山平太夫」の説明部分において、「河田蔵太左衛門」がより適切であると思われる所を、「阿多蔵太左衛門」と表記している。

また、「鎌田典膳」に関する記述のところ、(「新」薩藩叢書)を始め多くの写本が「人のつつしみある程(または「或り候程」)の器量ならでは」などとしているが、いわゆる「内閣文庫本」グループのものは、「ある」のところを「式る」のつとる」としている。『大漢和辞典』(諸橋轍次、大修館書店、昭和三十二年)によると、「式」という漢字には「のり」という読みがあり、「手本・模範」という意味もある。「或りあ

る」という字と比べた場合、「式」の方がよりふさわしいようにも思われる。あくまでも仮説であるが、「或」と記述した多くの写本は、いずれかの段階で「式」という字のくずし字を、読み間違えたのではないだろうか。

その他にも写本によって、あるいは同じグループどうしでも、細かい差異は多々見られるが、ここではこれ以上深入りしない。

結論から言うと、前述のとおり全体を通して唯一の刊本である『(新)薩藩叢書』が必ずしも「善本」とは言えないという状況の中で、名越時敏の「常不止集」に採録された「古の遺愛」の「原本」と想定されるものが一番近く、かつ全ての写本の中で、(唯一ではないかも知れないが)最も「善本」に近いと思われる「国立公文書館」所蔵本を中心の校訂本に据え、他に「鹿児島大学附属図書館」所蔵の島津久光書写本^々や、全国に数多存在する「旧典類聚」中のものの中で、その「原本」あるいは一番「原本」に近いのではないかと推定されるもの(「東京大学史料編纂所」所蔵本の一つ、二の(三)の【A】①ア)などを参照して校訂を進めることにより、もつとも良質の「刊本」にすることを旨として、「名越時敏史料三」に収録したものである。そしてその目的は、(時間的な制約は存在したが)ほぼ達成できたのではないかと自負している。

三 「古の遺愛」をめぐる町田久成と名越時敏の関係について

(一) 町田久成の所有していた「古の遺愛」

「古の遺愛」の写本として最も善本ではないかと判断している前述の「国立公文書館」所蔵本については、その「蔵者」が「町田久成」とある。また、「国立国会図書館」所蔵本や、「東京大学史料編纂所」所蔵本のうちの二つ（原蔵者 浅草文庫（東京府）／修史館第二局乙科令写／1878/66丁）については、前節で示したとおり「国立公文書館」所蔵本と同じく、内閣文庫本グループ（仮称）に属すると思われる。

ここで、これらの写本の経緯等について、少々考察してみたい。

まず、「内閣文庫」の蔵書は、一般に江戸城内の紅葉山文庫（徳川家文庫）や昌平坂学問所等の和漢書や記録類などの旧幕府関係のもので有名であるが、一方で明治以降の明治政府及びその関係者の手により収集されたものも多い（『内閣文庫百年史 増補版』（昭和六十一年、国立公文書館）等参照）。「古の遺愛」の「国立公文書館」所蔵本は旧「内閣文庫」の蔵書であったことが、表紙に貼付されたシールや、巻頭に捺されたその印などからも明らかである。これが前述の徳川家の「紅葉山文庫」の蔵書であったことはそもそも考えにくいのであるが、実際に「浅草文庫」・「書籍館」等の印と並んで、「町田久成献納之章」の印も押されており、明治以降の収集がほぼ明らかである。加えて、町田久成の該当時期の経歴等から、博物館の一連の変遷を経緯しての伝来であることもうかがわれる。

ところで、内閣文庫本グループ（仮称）に属すると思われる写本のうち、「国立公文書館」所蔵本及び「東京大学史料編纂所」所蔵本に記された「浅草文庫」及びそれ以降の流れについて少し補足したい（主要参考文献は前述の『内閣文庫百年史 増補版』及び『東京国立博物館百年史』（東京国立博物館編、昭和四十八年）である）。

「浅草文庫」の前身は、前述の幕府関係書籍類等を収集・公開するために、明治五（一八七二）年に湯島聖堂内に置かれた「書籍館」である。これが明治七（一八七四）年に浅草に移転し、「浅草文庫」と改称された。さらに明治十四（一八八二）年に「浅草文庫」の呼称を止め、翌明治十五年に「上野博物館書籍室」として整備される。さらに明治十七（一八八四）年に赤坂離宮の構内に「太政官文庫」が設置され、旧「浅草文庫」図書の大部分がこれに収められることとなった。しかしこれも長くは続かず、明治十八（一八八五）年十二月に内閣制度が発足すると、内閣記録局所管の文庫、すなわち「内閣文庫」として、昭和四十六（一九七二）年に「国立公文書館」が新設されるまで、長きに渡ってそれら大量の書籍類を管轄することとなった。

ところで、「東京大学史料編纂所」所蔵本には「明治十一年十二月以浅草文庫蔵本写之」とあるので、おそらく「国立公文書館」所蔵本がいったん「浅草文庫」に収集され、これを書写して「東京大学史料編纂所」所蔵本が作成されたのであろう。そしてその書写（作成）年代の一八七八（明治十一年）年は、ちょうど「浅草文庫」（の名称）が存在した一八七四〜一八八一年の間に合致する。同時にまたこの間に、町田久成が「古の遺愛」を「浅草文庫」に「献納」したことも推察されるのである。

（二）「常不止集」収載の「古の遺愛」と町田久成旧蔵「国立公文書館」

所蔵本との関係について

薩摩藩英国留学生（註 時敏の息子時成も英国留学生の一人である）で、博物館創設の父としても知られる町田久成は、実は名越時敏家と深

いつながりがある。時敏の二女筆（ふで）は、久成に嫁いでいる（ただし、名越（時成）家の除籍簿によれば、明治十七（一八八四）年九月に離婚している¹⁰）。「名越時敏日史」などからは、二女筆の嫁ぎ先の町田家及び久成との付き合いが、浅からぬ様子もうかがわれる。そのような中で、名越家と町田家の間でいろいろな書籍の貸し借り等が行われていたとしても少しも不思議ではない。向学心にあふれると思われる両者（名越時敏と町田久成）の間であれば、なおさらであろう。

「常不止集」収載の「古の遺愛」と町田久成旧蔵「国立公文書館」所蔵本とを比較した場合、既に触れたとおり、他のあらゆる写本に比べて類似性が高い。名越時敏と町田久成との関係も勘案した場合、両者の原本が共通している可能性、さらに、二人の間でその貸し借り（受け渡し）が行われていた可能性も十分考えられる。実はこの点も、「名越時敏史料三」の「古の遺愛」の第一の校訂本として、この「国立公文書館」所蔵本を考えた理由の一つである。

しかしながら、それを決定づける確実な史料は未見であるので、ここではその可能性を指摘するに留めたい。諸氏の御意見をいただければ幸いである。

おわりに

「鹿児島県史料 名越時敏史料」の翻刻・刊行作業を通じて知り得た情報の中で、本稿では「古の遺愛」の写本・刊本等に関する情報及びそれに関連するものとしての「旧典類聚」の諸本に関する情報を取り上げた。従来から把握していたものに加えて、多数の新しい知見が得られた

ことは幸いであったが、多くのものについて内容の詳細な調査が依然として出来ていないことは残念である。また、これ以外にもまだ把握できていないものが複数存在することも当然考えられる。そういう視点から言えば、本稿はあくまでも「中間報告」的なものであると言える。

特に「常不止集」のように数多くの他文献、書籍類を採録しているものについては、時間的な制約等もあり、完全をめざしながらも全てに渡ってベストの校訂ができていたとは限らない。その反省の上に立って、その一責任者として今後も努力して行きたいと考えている。

註

- (1) 過去の詳細については、黎明館のホームページ等を参照。
- (2) 「古の遺愛」については、安藤保「郷中教育の成立過程（下）——咄相中から郷中への諸問題について——」（鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編）第四十三巻、一九九二年）等も参照されたい。
- (3) もしこれ以外に存在しているのであれば、当方の努力不足をお詫び致したい。なお、その際にはぜひ黎明館調査史料室（内倉）まで御一報いただければ幸いである（電話099-2222-6085）。
- (4) 「福山平太夫」の説明の部分が欠落していることから、このように表記した（二の（五）参照）。
- (5) 参考までに、巻末に「旧典類聚」の収載史料の一覧を掲載する。
- (6) (3) と同様をお願いしたい。
- (7) 種子島出身で朝日新聞の「天声人語」の名付け親とも言われ、明治・大正期を代表する知識人として有名な西村天囚の二度目の夫人であ

る。なお、最初の夫人は死去している。

(8) 前掲拙稿「鹿兒島県史料 名越時敏史料」について ―収録(予定) 史料に関する書誌的な研究等を中心に― 参照。

(9) 「諸家調抄」「鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集九」では、案崎氏のところ、「阿多」ではなく「河田」と記述して

いる(本館調査史料室資料調査編集員梶ヶ山梨沙氏の御教示による)。

(10) 名越時敏の御子孫内村八紘氏の御提供資料による。

【附録】「旧典類聚」目録(収載史料一覽)

※ 編集・採録史料等写本により多少の差異があるようだが、ここでは各所蔵機関が保有する複数の写本の「原本」の可能性も考えられる、東京大学史料編纂所蔵本(のうちのひとつ、本文中二の(四)の③ア)による(ただし、同所のホームページ上のデータベースに基づく)。

「旧典類聚」を校訂本等として一つだけ選ぶとすれば、今後はこれを第一のベースとする必要があるのではないかと思われる。

- 一 「農州関原合戦覚書類」「関ヶ原陣始終大概之覚(慶長3年〜8年)」
- 「神戸休五郎覚書(慶長5年)」
- 「大重平六覚書(大重平六)」
- 「新納旅庵覚書(天正15年〜慶長7年)」
- 「本田助之丞覚書(文禄元年〜明和2年)」
- 「中馬大蔵覚書(天正6年〜慶長5年)」
- 「曾木弥次郎覚書(慶長5年)」
- 「黒木左近兵衛覚書(慶長5年)」
- 「横山弓内覚書(天正〜慶長5年)」
- 「桐野掃部介覚書(天正〜慶長5年)」
- 「井上主膳覚書(慶長5年)」
- 「山田有栄覚書(慶長5年)」
- 「押川強兵衛一世覚(元

龜2年〜寛永6年)」

二 「諸家大概記(建久〜寛文)」

三 「飯野由緒(永禄7年〜天正18年)」

「川上久国雑話(天正3年〜慶長15年)」

「泰清院公御記」「朝鮮入乱之事(天正10年〜慶長3年)」

「関原合戦卷(第2・3)(慶長4年・5年)」

「御代々御戦場御由緒之地覚并御居城由来記(文治2年〜慶長12年)」

四 「木崎原御一戦参考(永禄7年〜文禄元年)」

「忠平公御記(永禄7年〜天正16年)」

「加之藤城御由緒(永禄12年〜天正10年)」

「三国略誌(天正6年〜15年)」

「晴養生害之記(天正6年〜慶長12年)」

「御当家由来(天徳〜明応)」

「旧伝集(天正〜正徳)」

「貴久公軍記(大永6年〜弘治元年)」

五 「忠平公軍記(天文〜慶長5年)」

「日新公記(大永6年〜弘治元年)」

「泰公遺事(寛永9年〜延宝元年)」

「琉球御征伐記(慶長14年〜寛文13年)」

「聰毛由緒(天喜〜承応)」

「奥関助覚書(文禄年中)」

「大河平在番由緒(大河平休兵衛)」

六 「翰遊集(大永6年〜文禄4年)」

「関ヶ原合戦記 内題 関ヶ原合戦卷(4〜6)(慶長5年)」

七 「旧伝集」

八 「三国擾乱記」

九 「新納忠勝聞書」「町田式部元祖系図(慶長3年)」

「大口地頭記(永禄〜慶長)」

「島津大和守久章一件(慶長5年〜正保2年)」

「惟新公御自記(天文〜慶長5年)」

「古都院説(伊地知季安)(天保5年7月)」

「酒匂安国寺申状(承久3年〜長禄3年)」

「藩翰譜島津伝弁誤(文治2年〜天正15年)」

「朝鮮国唐島戦死人数記」「木崎原旧記(永

祿7年～慶長5年)」「日州耳川合戦日帳(天正6年)」「日州美々川合戦記(天正6年)」「盛香集(永祿7年～宝永3年)」

十八「征韓録(島津久通編)」「御家秘書(天正15年～慶安4年)」「古の遺愛(延享4年～寛延2年)」

十「島津御勲功記」「仁君遺名記(享保13年～寛延元年)」「伊集院肥

十九「明赫記(平田正表)」

前入道一代於御弓箭粉骨次第決勝記(永祿2年～文祿元年)」「関ヶ

二十「天誅録(建久～慶長)」

原御合戦以後日州辺江稲津狼藉候一件」「伊地知助右衛門家筋之事・

二一「南浦軍記(大永6年～天正15年)」「東目西目由来記(文治2年

池田左近将監貞安覚書(文祿～享保)」「伊作家太略記(長祿2年～

～延享2年)」

元祿8年)」「略御譜(治承3年～慶長3年)」「島原軍記(天正11年・

(うちくらあきふみ 本館調査史料室長)

12年)」「栗野由来記(永祿7年～寛政頃)」「亀鶴問答」

十一「山田聖栄自記(文治2年～文明14明^{年号})」「樺山玄佐自記(承久3年

～天正14年)」「遺事筆記(享保～宝曆)」「宗信公一件」「虎寿丸様

加世田御通筋覚」「三島本学房日記(天文20年)」「古老物語(天正

5年～15年)」「八重尾源五左衛門覚書」「木浦木番手八重尾氏由緒」

「中馬重方働之次第(慶長5年10月10日)」

十二「諸家由緒(忠久公御誕生御由緒之事e t c.)」

十三「諸家由緒(酒匂家由緒e t c.)」「伊作家由来(応永29年～天

正15年)」「御宝物由緒(文治2年～寛延2年)」「日州美々川合戦記

(天正6年)」「鎮西引付記(永仁7年4月10日)」「水剣由来記」「伊

地知駿河守日記(天正11年・12年)」「義久公御代椀飯」

十四「旧典拔書(神代～宝曆)」

十五「御譜略(治承3年～元祿11年)」

十六「16^古古今戦(神代～天正16年)・高麗渡(神代～慶長2年)・大島出

羽守書状」「旧典拔書(久安3年～宝曆頃)」「伊地知大膳覚書」「旧

記(神代～宝永頃)」

十七「管窺愚考(伊地知季安編)」